

民衆運動としての夕張事件

森 幸 雄

- 1 はじめに
- 2 本稿の基本的立場
- 3 事件についての炭労の記述
- 4 事件の経緯
- 5 炭労側に事件の記述がない理由
- 6 戸田城聖が指摘した事件の本質
- 7 経験者による事件の位置付け
- 8 創価大学が継承すべきもの

1 はじめに

戦後の労働運動の中心組合のひとつであった日本炭鉱労働組合（以下、炭労と記す）は2004（平成16）年11月19日に、札幌で解散式をおこなった。1950（昭和25）年の結成以来、54年間の歴史であった。旧総評の中心的な存在で、戦後の労働運動で大きな働きをしてきていた。

本稿でとりあげるのは、1957（昭和32）年に炭労と創価学会のあいだでおきた「夕張事件」といわれる出来事である。はじめに、簡単にこの出来事を記すと以下のようなものである。1957（昭和32）年に炭労は第17回定期大会で新興宗教団体への対策の一項を加える。創価学会を対象としたものであった。それをうけて、北海道炭労は6月18日、第10回大会で組織の問題として対決すると決定した。さらに6月27日には創価学会員が急増している夕張をモデル地区として、3ヵ月で創価学会を組合から排除しようとする指令をだした。これに対して、創価学会は炭労の姿勢を抗議する行動を起こした。夕張事件とは、そうした炭労との対決のなかでの一連の出来事を創価学会の側からまとめたものである。

2 本稿の基本的立場

夕張事件は創価学会の歴史のなかでおきた事件である。それを創価大学の『創価教育研究センター』でおこなう「池田研究」のひとつとして、ここで取り上げるのは、次のように考えるからである。

創価大学の創立者池田大作⁽¹⁾の思想や行動を理解するためには、池田個人の考えや行動をみるだけでは十分ではない。池田とともに活動してきた創価学会や創価学会インターナショナル(SGI)の人びとの動きまで視野を拡げてみていかないと、その思想や行動の理解は困難となるだろう。

1973（昭和48）年の創価大学滝山祭における記念講演「スコラ哲学と現代文明」をみてみよ

う。このなかで池田は、ヨーロッパの大学が中世の民衆の心に支えられ、民衆の心の盛り上がりによって成立したように、創価大学も大学をつくるにいたった民衆の心の高まりがあり、民衆の支えがあったことの重要性を指摘している。⁽²⁾「民衆のための大学」という創価大学の基本的性格はそのことを示したものであろう。

そうした意味で、夕張事件は創価学会にとって重要な出来事であるのは無論であるが、創立者の思想や行動を理解するうえで重要なことであり、創価大学を設立するにいたった民衆の心の盛り上がりを理解するうえでも重要な出来事であろう。大学はだれのために、なんのために存在するのかというテーマが浮かびあがるからである。

後述するように、夕張事件は、労働組合としての炭労の運動と創価学会のぶつかり合いではなく、組合員の生活や思想・信条のすべてをコントロールしようとする「炭労」に対する創価学会員の抵抗運動となっている。単なる抵抗だけではなく、狭い意味での宗教運動を越えた、新たな価値観の運動の始まりともなっている。そうした運動のなかで、池田の思想や行動が人びとの大きな支えとなり、池田の思想や行動は人びとの具体的な行動に反映していったと思われる。また、夕張の「経験」は「歴史」として創価学会運動に定着し、その後の創価学会運動での重要な財産となった。

夕張事件を考えるためには、複数の視点からの考察が必要となる。たとえば、①当事者である炭労と創価学会の行動、②マス・メディアの取り上げ方、③地域社会や日本全体の反応など、いくつかの視点からの考察が必要である。本稿では、その手始めとして、当事者である炭労や創価学会は「夕張事件」をどのようにとらえているかを手がかりに、考察していきたい。

そのために本稿で注目するのは、夕張事件をどのように「経験したのか」ということである。まずは、出来事として存在している夕張事件を、どのように「経験」し、歴史としていったかということである。結論からいえば、炭労は、夕張での出来事を断片的な出来事としてしか受け取らず、その経験を「歴史」として定着できなかったが、創価学会、とりわけ夕張の会員は、「経験したもの」としての歴史として、後世に伝えるものとしたといえよう。

3 事件についての炭労の記述

1957（昭和32）年の夕張での出来事を「夕張事件」というよび方でとらえているのは創価学会の側であり、もう一方の当事者の炭労はそうした出来事を歴史として認識していない。炭労は、1964年に『炭労十年史』⁽³⁾、1991年に『炭労四十年史』⁽⁴⁾と題する組合史をそれぞれ刊行している。この組合史には、1957年の夕張での出来事もなければ、創価学会についての記述もない。

それでは、この夕張での出来事に関心を持ったのは創価学会だけであり、社会的にはとるに足りないことであったのかというと、そうではない。1957年の全国大会で決定した、実質的には創価学会を対象とする活動方針、「新興宗教団体への対策」は多くのメディアでも取り上げられ、炭労の方針に対して、さまざまな意見も表明された。にもかかわらず、炭労の歴史には全く記述されず、歴史的な経験にもなっていない。

夕張での出来事について、炭労全体の組合史には記述はないが、地元の夕張の組合史では取り上げられている。夕張においては無視することのできない出来事であるためだ。1966年に出版された夕張労組の『労働組合史』⁽⁵⁾には、1957年の夕張での出来事が『折伏』で台頭した創価学会」というタイトルで記載されている。この記述は、1992年に刊行された、組合員の投稿による組合史『炭労-激闘あの日あの時』にも転載されている。この本は、通史である『炭労

四十年史』に記述されないことを残したいとの組合員の要望で編纂されたものである。

つづいて、創価学会では「夕張事件」として確定している「事件の経緯」を、炭労側の資料である夕張労組の『労働組合史』と突き合わせながらみていきたい。

4 事件の経緯

炭労が創価学会に強い関心を持ち始めたのは、1956（昭和31）年7月の参議院選挙からである。夕張労組の『労働組合史』によれば、創価学会が「三十一年七月の参議院選挙には、六名の候補者をたてて、三名が当選、その進出ぶりが、にわかになら注目されるようになった」⁽⁶⁾とあり、選挙との関連で創価学会への関心を持ち始めたことをはっきり認めている。

とりわけ、炭労の力が強かった夕張市で、創価学会推薦候補の得票が、炭労の予想を越えて多かったことは驚きであった。夕張では、社会党から立候補し、炭労などが支援した阿部竹松が21465票を得たが、創価学会の推薦候補の辻武寿がその1割の2567票を獲得し、保守系の木村禧八郎の1463票の2倍に迫っていた。社会党の地盤といわれた北海道全体でも辻武寿は約4万6千票を獲得している。

創価学会の北海道での発展をしめした第1回北海道総会の開催によって、創価学会はふたたび炭労の関心をよんだ。夕張労組『組合史』は「五七年六月十二日、札幌市に道内から信者一万数千人を集め『創価学会北海道第一回総会』を開いてから、とくに注目を浴びるようになった」⁽⁷⁾と記述している。この記述には総会開催日に誤りがある。第1回北海道総会は5月12日に開催されている。北海道総会の開催が6月12日であれば、5月19日に開催された炭労の全国定期大会に影響をあたえないが、創価学会の第1回北海道総会のほうが炭労の大会よりも早く開かれており、北海道総会の開催が炭労の方針に影響をあたえたことがうかがえる。

5月19日に、炭労は東京・芝の中労委会館で第17回定期大会をおこなった。ここで本部案を修正して「新興宗教団体への対策」の一項を加えることになる。炭労のこの方針をうけて、北海道炭労は6月18日の第10回定期大会で、組織の問題として創価学会と対決することを決定する。

つづいて、6月27日に創価学会締め出しを指令する。これは、主要5点からなり、①7月から9月までを第1期闘争期間とする。②7月中は、学会の活動状況と会員数を把握する対決準備期間とする。③道炭労本部に新興宗教対策本部を設置し、各山元支部にも同じく対策委員会を作る。④8月一杯は学会員撲滅期間として各支部を中心に活発な行動を起す。⑤9月はこの2ヶ月間の闘争成果を検討して第2次闘争計画を作る——というものであった。

創価学会の側の行動として、6月6日正午から、地元夕張の男子部員150名が夕張市中心部でデモ行進をおこなった。この模様は、全国ネットでテレビ報道された。創価学会本部ではデモがおこなわれることは承知しておらず、テレビの報道によりこのことを知った。

創価学会に対する炭労の圧迫は、前年10月ごろより始まっており、創価学会員の調査がおこなわれたり、「新興宗教と労働運動」と題する勉強会が開催されたりしていた。道炭労の決定を受けて、夕張ではさらに炭労による創価学会への圧迫が強まった。

6月27日、創価学会締め出し指令を知らずに、創価学会員への圧迫への抗議のため、夕張炭労事務所を訪れた地元夕張の三戸部・文京支部幹事に対して、夕張の炭労幹部から「7月4日午後1時から夕張市内で対決しよう」という提案がなされた。後日、夕張労働会館ホールを会場とし、北海道炭労委員長も出席し、双方10人ないし12～13人の委員によっておこなうとの連絡があった。また、たまたま同席していた北海道新聞の支局長から、炭労と創価学会の「紙上

討論会」の提案があり、北海道新聞の司会で29日に実施することとなった。

北海道炭労の創価学会締め出しの指令に対して、創価学会は、7月1日に札幌大会、2日に夕張大会を開催して、7月4日の炭労との討論会をむかえるという日程を決定した。創価学会の機関紙・聖教新聞では、6月30日付けの紙面の1面で「道炭労、遂に『僭聖増上慢』と化する」との見出しのもと、創価学会の対応を伝えている。公の場での討論で一宗の存亡さえも決するという「公場対決」という討論形式をもつ仏教の伝統からすると、7月4日の炭労との「対決」は創価学会にとってもっとも重要なものとなった。

6月29日に北海道新聞社会部長の司会で「紙上討論会」がおこなわれていたころ、留守であった三戸部支部幹事宅に、道炭労から「7月にはストがあり、忙しいため、対決は無期延期したい」との申し入れがあり、「対決」はおこなわれないことになった。創価学会が予定していた一連の行事は、炭労が創価学会との対決を避けたことがあきらかになったうえで、おこなわれるものになった。

創価学会札幌大会は7月1日、1万3千人が参加して、中島スポーツセンターで開催された。在京からも200名の青年部員が参加した。翌日の7月2日には、夕張で男子部員の約200名が夕張市内を行進している。夕張中心部の本町2丁目の十字街から、炭労病院、炭労事務所をまわるデモであった。夕張労組の『労働組合史』はこのデモについて「市民の記憶にもものこることであった」と記し、その反響の大きさを認めている。夕方には若菜劇場で1500人が参加して「夕張大会」が開かれた。炭労が対決討論を避けたのちも、この対立は社会の関心をよび、7月3日には北海道放送で「放送討論会」も放送されている。

創価学会との対決を避けるとする炭労の方針変換については、夕張労組『労働組合史』は「その後道炭労は、いたずらに糾弾に力をついやすことなく、組織内の教宣活動や組織体制の強化に力を注いで、創価学会の進出をくい止め、表面的な対立をみることはなかった」⁽⁸⁾と説明している。

夕張事件はこうした昭和32年6月から7月初めまでの出来事である。創価学会の「夕張事件」で取り上げられる重要な出来事は、炭労の資料でも出てきており、出来事として違いはないことがわかる。ただし、この事件をめぐる最大の違いは、創価学会では重要な歴史的な出来事とされているのに対し、炭労の組合史では記述すらないという点である。

5 炭労側に事件の記述がない理由

夕張事件に対して炭労本部は直接の接触をもたなかった。創価学会との対決をうたっていないが、創価学会に意見や要望を述べたり、交渉したりすることもなく、すべてを北海道の炭労の問題として処理している。一地方の問題であるとして炭労の歴史に載らなかったということではない。北海道炭労は、九州とともに炭労の重要な地域である。また炭労中央の委員長や役員には北海道炭労出身者が多い。事件当時の炭労の委員長である原茂は夕張の北炭平和労の出身であり、組織部長の吉村清一は北炭夕張労の出身であった。⁽⁹⁾とりわけ、夕張炭労は北海道の炭労の5分の1の勢力を持つという中核的な組合であり、炭労中央の委員長も出している。そして北海道の炭労の行動は、炭労中央の決議をうけたものなのである。

夕張の出来事が取り上げられない理由のひとつには、夕張の出来事を組み込むと炭労の輝かしい歴史が成り立たなくなってしまうことがあげられよう。炭労史をみると、夕張事件の時期は、昭和27年の六三ストから昭和34年から昭和35年の三池闘争への中間の時期として扱われている。そして、この時期は六三ストの経験から、組合員の生活に炭労が関わろうとすることが

組合活動として正しかったとされる時期である。

六三ストは、1952（昭和27）年10月17日から12月16日までの63日間にわたって実施された賃金闘争のための無期限ストである。この年は春に破壊活動防止法（破防法）反対のストをおこない、六三ストはそれにつづくものであった。このストライキ闘争のなかで、ストライキ中に払われない賃金の補填のために、多くの組合員がアルバイトによる出稼ぎや行商、土木アルバイトなどをせざるを得なくなった。また、組合員の妻も臨時の仕事をおこなったりした。⁽¹⁰⁾

この反省から、炭労は生協運動や労働金庫の設立・運営などに熱心になる。また、既存の地域機関を組合に近いものに再編している。たとえば、炭労の力の強い夕張市真谷地では、昭和28年7月に消費生活共同組合が設立されているし、昭和32年1月には部落ごとにあつた納税会を解消し、組合の共済機関として「生活互助会」がつくられている。また、婦人の組織化も盛んになった。戦前の国防婦人会が組織換えしていた地域の婦人団体を「炭婦協」として再編している。この「炭婦協」は生協や労働金庫を支えるものとなっていた。

炭労は「昔陸軍、今総評」といわれた総評の中核的な組合として、日本社会全体からも非難されにくい立場にあつたうえ、地域のさまざまな機関や団体に君臨するものとなり、対抗する存在を認めないものとなっていった。まさにこうした時期の炭労のあり方に、抗議したのが夕張事件といえる。

このあと、昭和34年から昭和35年には三池闘争をむかえる。総資本対総労働の戦いといわれた三池闘争は、安保改定問題と関連したものとなり、労働運動というよりは政治闘争の色彩が強まった。三池の労組内や炭労中央の内部でも、闘争の進め方をめぐって多様な意見があつたようである。運動方針をめぐる内部対立のなかで、政治闘争への傾斜を深めていく。

三池闘争の背景には日本の社会構造の変化がある。なかでもエネルギー源の、石炭から石油への転換は著しいものであつた。三池闘争が実質的に敗北した後、石炭をめぐる状況の変化がより明瞭になってきた。燃料炭などの石炭も海外調達が行われるようになると、政府の石炭政策の転換を求める闘争へと炭労の運動が変化する。ここでも闘争は対政府ということになり、政治的な視点の活動へと傾斜している。

夕張の出来事が炭労の歴史に取りあげられない理由のふたつには、創価学会に対する無知がある。

『炭労-激闘あの日あの時』（1992年）では削除された夕張労組の『労働組合史』では「三十一年七月の参議院選挙には、六名の候補者をたてて、三名が当選、その進出ぶりが、にわかに注目されるようになった」⁽¹¹⁾として、選挙との関連で創価学会への関心を持ち始めたことをはっきり認めている。この文に続いて「同時に、『折伏』と称する独特の信者獲得方法に、選挙違反のうたがひがあるとして、捜査当局の取り調べをうけるなど、社会的にも大きな話題のひとつとなった」⁽¹²⁾とあり、創価学会の活動を宗教活動の視点ではなく、政治的なものとしてしか見ていないことを示している。

また創価学会の主張として記述しているのは、「彼らのいう宣伝は『死んでも、生きかえる』とか『争議はやらなくとも賃金は上り、生活はらくになる』また『坑内で怪我をしない』等、まったく理解のできるものではない」⁽¹³⁾というものである。さらに創価学会員については、「信者の多くは、不具者と生活困窮者がその大半を占めていることによって明らかなように」⁽¹⁴⁾という認識を示している。

こうした記述は1992年の記述としては不適當ということで、再録される際に削除されたのであろうが、かえって創価学会への当時の認識を浮かび上がらせている。また、『死んでも、生き

かえる』というような主張しているとあるように創価学会の教義についての無知をさらけ出している。さらに夕張労組の『労働組合史』は1966年に発刊されたものであるにもかかわらず、創価学会員は「不具者と生活困窮者がその大半」という認識がもたれていた点は驚くべきことである。労働運動組織としての炭労が、こうした言葉を罵倒の言葉としている点は、炭労の性格を考える上でも注視する必要がある。

6 戸田城聖が指摘した事件の本質

夕張事件をきっかけに現れてきた炭労のこうした性格について、創価学会二代会長の戸田城聖は、昭和32年7月15日に『大世界』9月号の対談記事⁽¹⁵⁾のためのインタビューで次のように述べている。

夕張事件の発端について、「選挙の票が減ったというところから問題になっているんですよ」「選挙の票が足りないと言うんです。横暴ですよ」と述べている。参議院選挙での結果、炭労が問題にしたことを指摘している。組合員はすべて自分たちの候補に投票すべきであると考えたことは炭労の横暴であると述べている。

学会員が組合活動に熱心でないことを創価学会と対決するにいたった理由だとし、その例として、組合がけい肺病法の完全実施を要求しようとするのに、学会員の熱がはいらぬことをあげているがという質問に対して、「わたしは若い時代に岩見沢のね、農学校で炭鉱夫の肺を見たんです、アルコール漬の。石炭滓で真っ黒いですよ。(中略)ですからそれは守るために働くことは私は当然だと思うんですよ。炭労側の意見との相違はそんなもんじゃないですよ」と述べている。

そして、「彼らはもう独断政治ですよ。自民党の独断政治をきらいながら次に彼らが独断政治に陥っているんですよ」「労働ブルジョワと言われるみたいな親分が、独裁政治をやって、選挙の票が足りないから喧嘩になったんですよ、真相は。だからぼくは怒ったのです」と組合の体質を厳しく糾弾している。

『大白蓮華』7月号の「組合活動と信仰」⁽¹⁶⁾では、

「組合運動そのものの目的は是とするも、現在の組合活動が正当なる活動を実践しているかというに、同じ労働者の中にも階級ができていて、組合幹部はあたかも労働貴族とも言うべき存在となって、自らの政治的野心の温床となっているの感があり、その下積みとなって苦しんでいる労働者の実に多いことを知らねばならない」として、炭労を批判し、「我々の活動は、この下積みとなって労働運動によっても救われぬ下級労働者の一人々々をも完全に救い切る闘争であり、これはひとり労働者階級のみでなく、あらゆる各層各社会の民衆救済を念願とする大聖業である」として、創価学会の考える組合活動と信仰についての論を展開している。

7 経験者による事件の位置付け

夕張事件を経験した創価学会にとって、夕張事件はそれ自体独立しているものではなく、一連の出来事のなかに夕張事件が存在している。

夕張事件を経験した夕張のメンバーの体験集をみると、夕張事件を単独で取り上げるものはほとんどない。多くの会員が、5月12日の「第1回北海道総会」および8月18日の「若人の祭典 第1回北海道体育大会」・8月20日の「夕張支部結成式」の経験とあわせて体験を記している。夕張事件は、前後する大きな出来事とセットになって意義付けられている。

北海道は、創価学会にとって初代牧口常三郎会長・2代戸田城聖会長と関係の深い地であったが、創価学会の活動が本格的になるのは、昭和28年以降であった。それからわずか4年で2万5千世帯の会員が存在するようになり、昭和32年の北海道総会は新たに北海道総支部が誕生する総会となった。その盛大な会合が、創価学会の存在を炭労中央に認識させることになった。

夕張事件の最中に、池田参謀室長は大阪での参議院補欠選挙の公職選挙法違反の容疑者とされ、7月3日に夕張から帰ると直ちに逮捕された。いわゆる大阪事件の始まりであった。取り調べの勾留は14日間におよび、拘置所から出所したのは7月17日であった。

そのわずか1ヶ月後の8月18日に「若人の祭典 第1回北海道体育大会」が開催された。これに池田参謀室長は出席している。この体育大会において、夕張に支部が結成されたのである。この体育大会では、当日結成された夕張の女子部が優勝している。8月20日には千数百名が集結して、夕張支部結成式が夕張日活映画館でおこなわれた。夕張事件で活躍した三戸部菊太郎を支部長とする3450世帯の支部であった。また、会員が熱望していた寺院が清水沢駅近くの正妙山・興隆寺として落成した。夕張事件という大きな出来事に勝利しての支部結成式・寺院落成であった。

夕張事件の体験記録は、第1回北海道総会、夕張事件、若人の祭典第1回北海道体育大会・夕張支部結成式という、この3つの出来事がひとつながりのものとなっている。さらに、それぞれの場面での池田の指導と激励が綴られている。これら一連の出来事が、池田とともに行動した経験として、歴史になっているのである。

夕張は池田とのつながりが強かった。はじめ、北海道の創価学会の組織はそれぞれ東京の支部とつながりをもって活動していた。函館が蒲田支部、小樽が杉並支部、旭川が小岩支部、札幌が蒲田支部として活動し、夕張は文京支部として活動した。この文京支部の支部長代理であったのが池田である。夕張事件のおきた昭和32年には、1月13日から15日にかけて池田の夕張指導があった。市内の若菜劇場で、1300人の地区員が参加して開かれた地区総決起大会にも池田は出席している。夕張事件の最中の6月30日に池田は夕張で地元の会員を激励しているし、7月1日の札幌大会に出席したあとにも、再び夕張にもどり、夕張大会に駆けつけている。いわば池田の薫陶をうけて活動が盛り上がり、急激に会員数が拡大したときにおきたのが夕張事件だったのである。

8 創価大学が継承すべきもの

炭労が夕張事件で実施しようとしたことに無理があったのは明らかである。メディアでこの問題が取り上げられる際に、炭労の創価学会排除を正しいとするものは、ほとんどなかった。意見を求められれば、ほとんどが炭労を非としていた。7月4日に「対決討論」を取りやめたのも、これ以降同様の指示を出さなかったのも、炭労自身がそのことをわかったからであろう。

しかしながら、少なくとも創価学会排除の指示を行った時には、炭労は実行できると考えたのである。当時の炭労にはそんなことを思わせてしまうような巨大な力があった。

従来から人びとの生活の場であったところに炭鉱ができることは稀であり、多くの場合は炭鉱が開かれることによって、人びとの生活の場が出来上がったのである。夕張も明治中期に優良な炭鉱として開発されて、町ができた。このため炭鉱がまさに地域社会そのものであった。こうした炭鉱では、会社の意に反した行動には、あらゆる場面での制裁を覚悟しなければならず、生活の場を完全に失うことを意味していた。

この時期に会社以上に力をもっていたのが炭労であった。炭労は会社とユニオン・ショップ

制の労働協約を結んでいたもので、炭労を除名されれば自動的に解雇されることになっていた。このため、炭労に異を唱えることは、組合からの除名と同時に仕事を失う覚悟が必要であった。全国的なつながりをもつ炭労の組合から除名されれば、他の炭鉱での就業もできなくなる。こうしたユニオン・シヨップ制に基づき、推薦候補以外の候補を支持する反組合的行動をおこなった場合は統制違反として処分する、との組合決議が無効であるとの判例が最高裁判所から出されるのは昭和44年のことであった。また、前述のように、炭労は生活全般への支配力を強めていったのは夕張事件の時期である。消費生活や金融などさまざまな領域で、炭労と関係の深いものになうようになっていた。

この意味では、夕張事件の時期には炭労という労働組合があらゆる生活場면을支配する唯一の共同体となり、炭鉱の人びとはその一員としての行動することを強いられた状況にあった。しかも、炭労は民主勢力であり、労働運動の中核である総評の中心的組合であり、批判されにくい存在であった。

こうした団体の行動に異議申し立てをおこない、社会的な問題としていくことには、非常な勇気が必要であった。そんな抗議の声をあげたのが、創価学会、とりわけ夕張の創価学会員であった。

6月6日の地元青年部のデモは、そうした異議申し立てとみることができる。後日の7月2日の夕張デモが、夕張炭労事務所前を通っておこなった印象が強すぎるためか、この6月6日のデモについては1974（昭和49）年に発刊された創価学会の『北海道広布二十年史』の夕張事件の項⁽¹⁷⁾には記載がないし、組合の側の記録にも記載がなかった。こうしたなかで、池田は『人間革命』第11巻「夕張」の章で、地元の青年部員たちによるデモについて多くの記述をさしている。この行動は学会本部と相談のうえでおこなわれたものではなく、地元青年部が自主的におこなったものである。ある意味では「勝手に」おこなった跳ね上りの行動といえなくもない。この行動はそうした問題点を含んでいるが、『人間革命』では、地元の行動を青年の正義の発露としてあたたかく記述している。と同時に、この事件を跳ね上りの行動に終わらせないような対応を、池田たち学会本部と地元の学会員がとっていることを忘れてはならない。『人間革命』の発表後、1994（平成6）年に発刊された『北海道広布40年史』⁽¹⁸⁾には、写真付きで6月6日のデモが紹介されている。

こうした夕張の組合員である創価学会青年部の行動が、炭労にとって全く予期していなかったために、一層理不尽な北海道炭労による創価学会への行動を生んだものと思われる。青年達の素朴な行動が炭労の本質をあきらかにさせる契機となった。

民衆の力は偉大であるといわれるが、その民衆が力を発揮することは容易ではない。特に相手が、理不尽なことを押し通せるだけの力をもっている場合には、民衆がそれに対して非ということはいへんな勇気と覚悟を必要とする。

夕張事件はそうした困難な状況で、正義のためには勇気をもって実践したことの「歴史」である。この実践は経験されたものとして、人びとの歴史となっている。くり返すが、池田の思想や行動は、池田個人の考えや行動を見るだけでは十分ではない。池田とともに活動してきた創価学会や創価学会インターナショナル（SGI）の人びとの活動まで視野を拡げてみていかないと、池田の思想や行動の理解は困難となろう。夕張事件を通して、池田とともに戦った人びとの考えや行動を理解することによって、より大きなひろがりをもつ池田の思想や行動を知ることができよう。

夕張事件という民衆の盛り上がりの経験は、創価大学が設立されるにいたった民衆の盛り上

がりをとらえるうえで貴重な歴史的経験として、それはまた創価大学の基本的な役割を考察するうえでも重要なものであると考える。

(注)

- (1) 違和感のある場合もあろうが、社会学系の論文の作法にしたがい本稿では敬称はつけないことにする。
- (2) 拙稿「第2回滝山祭創立者記念講演『スコラ哲学と現代文明』をよむ」(2004年) 創価大学創価教育研究センター『創価教育研究』第3号 67-74ページ。
- (3) 日本炭鉱労働組合編『炭労十年史』(1964年)。
- (4) 日本炭鉱労働組合編『炭労四十年史』(1991年)。
- (5) 日本炭鉱労働組合『炭労-激闘あの日あの時』(1992年)。
- (6) 夕張炭鉱労働組合『労働組合史』(1966年) 30ページ。
- (7) 同上。
- (8) 同上 31ページ。
- (9) 前掲『炭労四十年史』978ページ。
- (10) 同上。
- (11) 前掲『労働組合史』30ページ。
- (12) 同上。
- (13) 同上 32ページ。
- (14) 同上 33ページ。
- (15) 「創価学会のハラのなか——会長は語る、学会の今後と内幕」(1957年) 世界仏教協会『大世界』9月号 8-20ページ。なお、本資料は塩原将行・本センター事務長の御教示による。
- (16) 戸田城聖「組合活動と信仰」(1957年)『大白蓮華』7月号。
- (17) 聖教新聞社北海道総支局編『北海道広布二十年史』(1974年) 82-93ページ。
- (18) 聖教新聞社北海道総支局編『創価学会 北海道広布40年史』(1994年) 61ページ。